

太平洋の橋とならん

教頭 吹野富美夫

「願わくは、我、太平洋の橋とならん」。この言葉は、新渡戸稲造が東京大学へ入学する際の面接試験で、面接官である教授から、「あなたは、英文学を学び、将来、何をやりたいですか」との質問に対する回答で、新渡戸の一生を貫いた志を表したものです。

新渡戸稲造と言えば、かつての五千円札の肖像になったことで知られています。さらに、新渡戸は、『武士道 ぶれない生きざま』を著した前田信弘氏によれば、『武士道』の著者であるとともに、国際連盟事務次長として活躍し、命尽きるまで「太平洋の橋」としての役割を果たすべく奔走した人物として紹介されています。

『武士道』の執筆は、新渡戸がドイツ留学中にベルギーの法学者ラブレーから、日本ではどのように道德を教えるのかと問われ、即座に返答できなかったことが端緒と記しています。新渡戸は、その答えとして武士道を見出し、武士道が礼儀、礼節、そして名誉を重んじる日本人の精神を育んだことを欧米人に説明しようとして英文で執筆しました。この『武士道』は、世界中の人々から日本と日本人を理解するための格好の書籍となり、当時の世界的なベストセラーになりました。

新渡戸は、1920（大正9）年に国際連盟が発足すると事務次長に任命され、国際連盟の精神の普及と実践に努めました。特に、各国の思想や知識を交換することで国際関係の改善を図ることを目的に設立された国際知的協力委員会の活動に取り組みました。現在、この精神はユネスコに受け継がれています。

晩年、新渡戸は、太平洋問題調査会の理事長を引き受けるとともに、日米関係が悪化することに憂慮して様々な講演活動に奔走し、日米の関係改善に尽力しました。しかし、日本は、1933（昭和8）年、国際連盟を脱退しました。そして、新渡戸は、平和への最後の望みを叶えるため、体調が優れないまま太平洋を渡り、第5回太平洋会議で日本代表として臨みましたが、その演説が生涯最後の演説になりました。

勝田高校の皆さん、これから何を学びますか。そして、将来、何をやりたいですか。その先に、自分が歩む道の扉が開くことを、新渡戸稲造は私たちに教えてくれています。

平成30年12月13日